平成二十六年一月投句

しゃがみこみ初夢を聞く介護士の　寒卵東京五輪を見るつもり

弾初の一人の広さ遮音室　勝利　母編みしマフラーを巻き祈願せる

春隣カタカナの名のしゃれた町　寒木瓜や昼の花街の路地ぬけて　光子

初恵比寿済ませしシェフの笑顔かな　双子かもしれぬ大ぶり寒卵

つまみ上ぐ煮凝箸にくずれけり　佳与子　大木の洞に凍てゐる銀杏の実　真理子

正門へ廻り直して初詣　初夢の語る筋なき紙芝居

大銀杏冬木となりて境内に　嬰児の泣き声囲む聖夜かな

冬の日の影の大きなかくれんぼ　節子　嬰児の手に力あり年新た　由紀子

はずされしマスクほのかに紅のあと　寒晴の本丸風の吹きさらし

平成二十六年二月投句　【志賀島】

松明の届かぬ闇に海凍てる　勝利
寒風に白装束の禰宜が舞ひ
星冴ゆる神楽囃の遠音かな

海の中道の外海春のなみ　節子
春の風鹿角堂を吹き抜けて
焼山やかつて狼煙の上がりし地

島宮の絵馬古りしまま寒椿　光子
わたつみに夕日のほむら春告げて
春潮に沈む夕日を惜しみけり

早春の磯暮るるまで波ぬれて　真理子
鳶の空島にひろごり草青む
防人の歌を尽くして島おぼろ

遥拝所越しの大灘つちふれる　由紀子
ひれ酒を一献島に再会す
退りゆく潮に岩場の石蓴揺れ

【お休み】　佳与子

平成二十六年三月投句　【筑紫神社】

三毛猫の寝て陽炎ひのトタン屋根　勝利
従姉妹ですみな似てゐます春日向　真理子
雁帰る吾も新しき日に向ふ　初午や宝満山の晴れ渡り
林道のこれより続く花しどみ　節子
囀りを聞かせる電話耳にあて　青文字の花にあたたか登山口
春煖炉ランチタイムは過ぎてをり　直会へ手招きの禰宜あたたかく
垣繕ふはずの父亡き一年を　光子
炭浅く埋けてありけり春炬燵　早春の風祓はるる幣にかな
あのあたり水城の森や青き踏む　【お休み】　生きにくし世とは死ぬにも涅槃西風　由紀子
家の根繕うて夫赴任地へ　佳与子

平成二十六年四月投句　【河内池（あじさいの湯）】

横座る五指のソックス花の宴　寮生の頃の話も薔薇の卓

孫の手からかがみしばばに花吹雪　勝利　駒鳥の鳴き交す音に歩をゆるめ

四月馬鹿子はアメリカに移住すと　山の湯へ届く郵便金鳳花　光子

花ミモザキリン届かぬ高さまで　花を呼ぶ関西弁の九官鳥

新興の街新しき花名所　佳与子　鳥追いの竹の女に花吹雪　真理子

羽ばたける鳩花屑を舞ひ上げて　水音のくぐもるあたり初蛙

食卓を窓に片寄せ春惜しむ　花好きな父満開の花に逝き

谷沿ひの石楠花コース人増えて　節子　教え子に囲まれ通夜の春灯　由紀子

古池の鯉春水を動かして　山の湯の径の日向に春惜しむ

平成二十六年五月投句　【白野江公園】

遠眼鏡丸き卯浪を近づけて　砂に書く文字を卯浪のさらひゆく

老ひ藤を負うごとく張る若き藤　勝利　麓より通ふ尼僧や余花のなか　光子

熊蜂の影の地上に落ちて失せ　囀をさへぎるもののなき山に

休憩所形ばかりの夏暖簾　湖の卯浪古葭の屑を寄せ

間隔を取りつつ鷸の威嚇かな　佳与子　青嵐ひと雨を呼ぶ匂ひして　真理子

水かげろうゆれて彼女の夏帽に　つる薔薇の赤に連なる家二軒

子雀も人間の子もよく跳ねる　展望所までの木漏れ日奢我の花

母の日に妻となる人連れて来し　節子　一山を巡り一枝の余花に会ふ　由紀子

上りには気づかずに過ぎ余花の径　砂山にトンネル掘る児夏来る

平成二十六年六月投句　【高搭山】

ががんぼの脚だけ残り蜘蛛の網
釘刺さる地蔵の背に五月闇　勝利
握りをる蛍の光指を透け

さくらんぼ食べ始めたら止まらない
独楽のごと廻してみたしさくらんぼ　佳与子
紫陽花に包み込まれしベンチかな

卯浪立つ海へ五分の渡船かな
高層のマンション映る代田かな　節子
眠られぬ夜を通し鳴くほととぎす

故郷よりこの地に長く枇杷を食む
夏は来ぬと歌ひて山の音楽堂　光子
実梅落つ落つるがままにこの頃は

山の湯へ背振嶺つづく合歓の花
かわほりの飛び交へる濠暮れ残る　真理子
地蔵堂高く祀りて梅雨の山

登り来し山あじさいに風青く
工場の煙消え入る梅雨の空　由紀子
垂れこめし雲に遠のく時鳥

平成二十六年七月投句　【金毘羅池周辺】

芭蕉の句揺れる風鈴南部鉄　勝利
夏料理しぶしぶと取る男振　節子
書き終えし形代を風通り抜け　光子
炎天に下りし雀が痩せてをり　【お休み】
工場の空き地ニガウリ畑となり　佳与子
亀の石軽鴨の石ほぼ決まり
翡翠の戻りをしばし待つことに
草に置き道にも忘れ日傘かな
一万歩コースの標山青葉

母好む水引草の咲き初めし　真理子
占ひの灯の薄暗き夜店かな　由紀子
大波止へ夜店提灯つらなりて
水底におたまじゃくしのゐて動く
藁しべを銜え青鷺又一羽
うふといふ夢にまだ笑み昼寝の児

平成二十六年八月投句

長雨に肩をすぼめて夏の鷺
そこの丘の手前に立ちし虹の脚
葉を分けて潜る暗きに茗荷花

千屈菜に母の鼻歌聞こえくる
秋の蝉途切れ途切れに鳴き始め
傘立てに虫取り網と白日傘

七夕の笹に願ふは一つにて
抑留をわづかに語り盆の月
仏花きらさず育て花木槿

勝利

節子

光子

母見舞ふ花に加えて韮の花
病棟のロビー七夕笹の立ち
背振嶺の萱の綱引く盆祭

新盆や跡継ぎといふ重たき座
七年の義父との暮し白芙蓉
まだ義父の声聞こえさう夏座敷

【お休み】

真理子

由紀子

佳与子

平成二十六年九月投句　【太宰府　観世音寺　水城など】

足元の花に始まる花野かな　勝利

暮れ初めて熱き蕾の曼珠沙華　真理子

天空に動物園や秋の雲　由紀子

水城門跡発掘の草に露　節子

観世音寺梵鐘の陰茸出で　佳与子

頭だけ見えて案山子の水城址　光子

八朔や男の子に馬の藁細工

待宵や髪さらさらと指の間を

白萩に閉ぢられし門錆びてをり

水城門在りし跡とや昼の虫

一枚はすでに捨田の露草に

白萩の低く垂れたる旅人の碑

晴れ渡る筑紫野の空今日白露

発掘の水城の礎石つくつくし

蔵町の菓子屋横丁こぼれ萩

【お休み】

平成二十六年十月投句　【飯盛神社　（流鏑馬神事）】

川曲る葦火も曲るあかね雲　谷に向く神馬の柵や秋祭

流鏑馬のいよよに鵙の高音かな　勝利

流鏑馬を駆け終えし馬汗光り　真理子

流鏑馬の的秋天へ弾け散り　寄進筵十枚とあり秋祭

三頭の試走始まり秋まつり　流鏑馬を待つ人垣や秋日濃し

コスモスの畑流鏑馬走り過ぐ　節子

流鏑馬の的射し音や宮の秋　由紀子

鉦叩右に聞えて左にも　流鏑馬の射手の横顔秋の日に

流鏑馬の射手七人や秋祭

流鏑馬の陰陽の声秋天へ　光子

【お休み】

蹄音駆け上り来る秋祭　佳与子

平成二十六年十一月投句　【大濠公園】

落葉掻日の温もりも籠に詰め　勝利
もう粘りなき蜘蛛の糸風は冬
軒下を猫小走りに初時雨

団栗の集まる森のくぼみかな　節子
地下を出る階段に切れ秋の空
サイカチの棘に刺しあり五円玉

幸せは簡単なもの落葉掃く　光子
モノクロの写真懐かし七五三
来ぬバスを蓮の実投げて待ちにけり

ギャッと声落とし冬立つ鷲の空　真理子
亡き犬の匂ひ嗅ぐ犬落葉径
落葉掃きまた落葉して暮るゝかな

澄む水にひょいと魚を銜へし鵜　由紀子
四方より手締の声や酉の市
愛想なき珈琲店主夕時雨

【お休み】　佳与子

平成二十六年十二月投句　【小倉城】

放たれし鷹より猛し野の鴉　繕ひもの出して来にけり日向ぼこ

靴底をがりがり鳴らせ霰来る　勝利　クッキーとココアたのみて日向ぼこ　光子

フレームの枠だけ残り荒れ畑　セザンヌの絵を見て聖樹の銀座まで

車夫もまたポーズをとりて七五三　旅の荷のひとつもなくて鴨来る

蜘蛛の糸からみし落葉よく廻る　佳与子　背を丸め頭からっぽ日向ぼこ　真理子

クレーン止め煙草一服川普請　冬の虫虚空さぐりて尺をとる

駅までのバス束の間の日向ぼこ　十二師団司令部正門冬紅葉

親を恋ふ猫の鳴き声冬の雨　節子　本堂をその影に入れ銀杏散る　由紀子

帆柱山彼方に時雨れゐるらしく　読み解く連綿体や実南天